

加羅の悲劇

三井 淳

いそたけるのかみ 神の猛五十 真相に迫る

10

欽明二十三年(五六二)、
慶尚北道高靈(コリョン)

で勃発した加羅最終戦争の模様は、日本書紀に余すところなく描かれているが、この戦闘は、言語(ゴンゴ)に絶するヤマト軍の無残な敗退に終わった。

新羅軍の挑発に乗せられ大加羅(おおから。高靈)に誘い込まれたヤマト軍は、満を持していた新羅の大軍に包囲されせん滅、将帥の河辺臣瓊缶(かわべのおみこえ)は、妻の甘美媛(うましひめ)と共に虜(とりこ)とされた。この時の新

羅軍の長を日本書紀は「鬪将」として「いくさのきみ」と訓(よ)ませている。

イサマラはこの場面には登場していない。この辺りの事情は、三国史記からうかがい知ることが出来る。

長年にわたり加羅に軍事介入して来たヤマト軍に引導を渡すべく、イサマラは

此度(こたび)も総帥として高靈へ撃つて出るつもりでいたのだが、そこへ向け、時に十六歳の少年であった斯多含(サタハム)なるが先將を志願した。イサマラは初陣以来五十有余年、もはや齢(よわい)七十を越

していただろう。この際後輩を育成すべきのおもんばかりからか、斯多含に先陣(はばか)られる。

を委ね、自らは後詰(ごづつ)めに甘んじた(以上三国史記斯多含伝より)。この斯多含が、鬪将のモデルであったと思われる。当時のヤマト軍中において、新羅の脅(きょうしゅう)と見え

ばイサマラに尽きるのであるが、それがいままで見たり(かた)へ向け曝(さら)わなるまま、ヤマトの方

ことも聞いたこともないガキ風情が矢面に立っているのである。これなる新參敵將の突拍子もない出現が、「鬪将」表記に決着した裏事情だったのでないか。それにしても、鬪将の仕

出かしたることは無茶苦茶であり、口にする(こと)すら憚(はばか)られる。
夫河辺臣瓊缶の目の前で
その妻甘美媛を「犯し」、
ひとり徹底抗戦する調吉土
伊企難(つきのきしいきな)を捕らえるや、その禪(は)かま)を「剥(は)がし」、
尻髻(しりたづら)のあらわなるまま、ヤマトの方

日替わり連載コーナー

◇月曜日は島根県立図書館の「おす
◇木曜日は内藤博之さんの「ガウデ